

201523009A

厚生労働科学研究費補助金  
医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業

# 効果的な献血推進および 献血教育方策に関する研究

平成27年度 研究報告書

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター  
HIV/AIDS 先端医療開発センター長

白阪 琢磨

厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業

# 効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

平成 27 年度 研究報告書

国立病院機構大阪医療センター  
HIV/AIDS 先端医療開発センター長

白阪 琢磨

# 目 次

## ■ 総括研究報告

- 1 効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究…………… 7  
 研究代表者：白阪 琢磨（国立病院機構大阪医療センター HIV/AIDS 先端医療開発センター）

## ■ 分担研究報告

- 2 献血推進施策の効果に関する研究…………… 19  
 全国 8 ブロック別にみた献血本数の将来推計の試み  
 研究分担者：田中 純子（広島大学大学院 医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学）
- 3 供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究…………… 27  
 研究分担者：西田 一雄（日本赤十字社 血液事業本部）
- 4 輸血液の需要と献血教育に関する研究…………… 29  
 研究分担者：秋田 定伯（長崎大学病院 形成外科）
- 5 献血推進に向けた研修方法に関する研究…………… 41  
 研究分担者：瀧川 正弘（日本赤十字社 血液事業本部）
- 6 献血推進の為の効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究…………… 45  
 研究分担者：林 清孝（エフエム大阪音楽出版株式会社）
- 7 若者の献血行動を促進する効果的な教育プログラムに関する研究…………… 49  
 研究分担者：大川 聡子（大阪府立大学 地域保健学域看護学類）
- 8 HIV 感染ハイリスク層への情報伝達方法及び意識調査の研究…………… 59  
 研究分担者：生島 嗣（特定非営利活動法人ふれいす東京）
- 9 海外における献血推進の実状と効果的な施策のあり方に関する研究…………… 81  
 研究分担者：河原 和夫（東京医科歯科大学大学院 政策科学分野）

# 総括研究報告



## 1

## 効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

- 研究代表者：白阪 琢磨 (国立大阪医療センター HIV/AIDS 先端医療開発センター)
- 研究分担者：田中 純子 (広島大学 大学院医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学)  
 献血推進施策の効果に関する研究
- 西田 一雄 (日本赤十字社 血液事業本部)  
 供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究
- 秋田 定伯 (長崎大学病院 形成外科)  
 輸血液の需要と献血教育に関する研究
- 瀧川 正弘 (日本赤十字社 血液事業本部)  
 献血推進に向けた研修方法に関する研究
- 林 清孝 (エフエム大阪音楽出版株式会社)  
 献血推進の為の効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究
- 大川 聡子 (大阪府立大学 地域保健学域看護学類)  
 若者の献血行動を促進する効果的な教育プログラムに関する研究
- 生島 嗣 (特定非営利活動法人 ふれいす東京)  
 HIV 感染ハイリスク層への情報伝達方法及び意識調査の研究
- 河原 和夫 (東京医科歯科大学 大学院政策科学分野)  
 海外における献血推進の実状と効果的な施策のあり方に関する研究
- 研究協力者：大平 勝美 (社会福祉法人 はばたき福祉事業団)  
 柿沼 章子 (社会福祉法人 はばたき福祉事業団)

## 研究概要

平成27年度本研究班では次の4研究を実施した。

1. 効果的普及啓発方法に関する研究 研究分担1 (研究分担者 田中純子) 献血推進の普及啓発活動が献血実績に与える影響に関して、昨年度は出生年別にみた献血本数の推移を解析、本年度は年齢や出生年を考慮した献血本数の推移につき解析を行った。 研究分担2 (研究分担者 西田一雄) 今年度は、阻害要因関連の調査・分析のため、1) 献血推進広報効果調査(一般の方対象)の実施、2)「献血推進2014」及び「献血推進2020」への取り組みに係るアンケート調査(血液センター対象)を実施し分析を行った。研究分担3 (研究分担者 秋田定伯) 長崎大学医学部保健学科の学生を対象にアンケート調査を実施した。献血を敬遠するものが献血未経験者で50%以上であり、献血の制度理解と積極的な参加には、若年からの献血経験が必要であると示唆され、医療職を目指す学生に対しても献血に関する継続した効果的な広報活動の展開が重要であることがわかった。 2. 献血教育研究 研究分担4 (研究分担者 瀧川正弘) 全国学生ボランティアを対象とした研修会を実施し、より有効な献血推進を展開するためのスキル向上を図った。長年積み上げた全国学生ボランティアによる研修が、互いを刺激し、各地域の取り組みを参考に、若年層に向けた献血推進を展開出来る環境が整いつつあることが確認できた。 研究分担5 (研究分担者 林清孝) 献血初体験者の増加のため、高校生の音楽イベント、Ustream等での配信、番組内の血液型不足情報の放送、ガクスイメンバーからの呼びかけ、スマホのアプリ開発等を提案した。研究分担6 (研究分担者 大川聡子) 大学生を対象にアンケート調査を実施した。若者による若者への啓発のために、大阪府藤井寺保健所薬事課・地域保健課及び大阪府赤十字血液センター南大阪事業所と連携し、献血ボランティア講座を行い、学生献血ボランティアを養成した。アンケート翌週にはキャンパス内の献血バスで献血を行った。 3. 安全な献血に関する情報提供方法の研究 研究分担7 (研究分担者 生島嗣) 今年度は、献血でHIV陽性が判明し

た MSM 2 名および献血習慣のある MSM 1 名を対象に、来年度に実施予定の web アンケートのためのパイロットとしての聞き取り調査を実施した。インタビューシートを作成し、半構造化面接を個別に実施した。生涯の献血教育に触れた機会、献血時の問診を受けた経験について聞き取りを行った。加えて、これまでの MSM としての気づき、性行動、HIV 検査行動に聞き取りを行った。結果、今回のインタビュー協力者の献血への動機は、すべての人が社会貢献であり、検査目的は居なかった。また、ウィンドウピリオドについての知識の浸透が不十分である点、現行の献血対象の排除項目の説明が MSM には必ずしも説得力のあるものにはなっていない可能性が示唆された。

4. 海外の実態調査に関する研究 研究分担 8 (研究分担者 河原和夫) 本研究では、世界各国の血液事業の中で、国情が日本に類似している国を選択して献血推進方策や献血教育の実態を調査して、わが国の献血事業の推進に寄与するための最適解を検討した。

## 研究目的

本研究では、1) 効果的普及啓発方法に関する研究、2) 献血教育研究、3) 安全な献血に関する情報提供方法の研究、4) 海外の実態調査に関する研究 を実施し、最終年度に結果を総合的に解析する。

## 研究方法および結果

本研究では、大きく次の 4 つの研究を実施した。1) 効果的普及啓発方法に関する研究、2) 献血教育研究、3) 安全な献血に関する情報提供方法の研究、4) 海外の実態調査に関する研究。具体的には、次の 8 つの研究分担を実施した。研究分担 1: 献血推進施策の効果に関する研究? 全国 8 ブロック別にみた献血本数の将来推計の試み? (田中純子)、研究分担 2: 供血者の実情調査と献血促進および阻害因子に関する研究(西田一雄)、研究分担 3: 輸血液の需要と献血教育に関する研究(秋田定伯)、研究分担 4: 献血推進に向けた研修方法に関する研究(瀧川正弘)、研究分担 5: 献血推進の為の効果的な広報戦略等の閲覧に関する研究(田辺善仁、林清孝)、研究分担 6: 若者の献血行動を促進する効果的な教育プログラムに関する研究(大川聡子)、研究分担 7: HIV 感染ハイリスク層への情報伝達方法及び意識調査の研究(生島嗣)、研究分担 8: 海外における献血推進の実状と効果的な施策のあり方に関する研究(河原和夫) の 8 研究である。本年度の研究に付き各研究分担毎にまとめる。

研究分担 1: 今年度は、以前に報告した全国の献血本数及び献血者数の推定を元に、仮に、献血推

進活動などにより献血回数が増えた場合に推定される、需要と供給の解析を行った。また、全国 8 ブロック別に、献血本数、献血者数の推定を行った。今年度は、全国 8 ブロック別に、20 年度献血回数別にみた 21 年度の性・年齢別献血行動推移確率を推定した。その結果、どのブロックにおいても高齢群では、献血回数 0 群が次年度も 0 回である確率が高く、献血回数 1 回または 2 回以上の群が次年度も 1 回または 2 回以上である確率が高い傾向を示した。さらに、全国 8 ブロックのうち、関東ブロックの献血者数・献血本数の将来予測を男女別に行った。その結果、推定献血本数について、男性では 2008 年 (1029 千本) から 2013 年 (1108 千本) まで単調に増加した後、減少に転じ、2023 年には推定 1032 千本となった。女性では 2008 年 (550 千本) から 2010 年 (563 千本) まで増加した後、やはり減少に転じ、2023 年には推定 501 千本となった。これは、全国とほぼ同様の傾向を示した。次年度は、引き続き、他の 7 ブロックにおける献血本数、献血者数の推定を行う予定である。

研究分担 2: 医学の進歩によって臓器移植が可能になるなど、治療における輸血用血液製剤の需要は高まり、特に、改正臓器移植法の施行に伴い緊急かつ大量輸血の事例が増加している。今後安全な血液を如何に安定的に確保するかが重要な課題である。厚生労働省が実施した若年層意識調査の結果及び検証を踏まえて検討された「献血推進のあり方に関する検討会」報告においても輸血用血液製剤の需要の増加にも拘わらず、若年層の献血離れの傾向に歯止めがかからないことが指摘されている。その理由がまだ十分には明らかにされていな

いことから、平成21年度から本研究において献血推進における広報の効果に関する研究を実施してきた。今年度は概ね①献血推進広報効果調査（一般の方対象）②「献血推進2014」及び「献血推進2020」への取り組みに係るアンケート調査（血液センター対象）

を通じて、阻害要因関連の調査・分析を行った。

研究分担3：献血・輸血に対して意識が高いと思われる医療職を目指す長崎大学医学部保健学科（看護科、理学療法科、作業療法科）を対象に意識調査を実施し、献血する側の若い世代に、アンケートに答えてもらうことで、献血・輸血の重要性を意識づけ、献血推進の広報活動となる行動変容を検討し、被験者の属性、自由記載とともに、献血に対する認識の調査を実施した。これまでの調査で献血を忌避する理由の一つとして挙げられた献血時採血時の疼痛のフェイススケール、輸血を想定した際の4段階選択調査を実施し、これまでの当研究班でのデータを踏まえて検討した。これまでの調査結果から献血を敬遠する理由が、「なんとなく不安」、「健康上できないと思った」、「献血する時間がない」などが増加してきており、それらの具体的事柄を調査した。また、長崎大学病院来院する年2回の献血車でアンケート調査で、献血に関する広報活動効果を調査した。さらに、本年度から大阪府立大学分担班と共に複数施設での献血・輸血に関する同様のアンケート調査を実施し献血教育プログラム設立に向けて検討した。

研究分担4：より安全な輸血用血液製剤を安定的に供給するためには、日常からより有効となる献血推進を展開する必要がある。近年は、特に若年層献血者が減少傾向にあり、献血離れの現象があることが指摘されており、同研究事業では「供血者の実情調査と献血促進及び阻害因子に関する研究」において、その原因の解明を行い、献血推進に向けた戦略的な広報の開発研究に取り組んでいる。一方で、広報展開も含めたより有効な献血推進を継続的に実施し、目標を達成するためには、職員や学生献血推進ボランティア等のスキル向上が不可欠であり、理想的な研修モデルを構築することが重要であることから、本年度において学生ボランティアの研修と、この研修から派生した展開事例を評

価した。

研究分担5：若者に対して献血への動向及びその重要性と理解度を測るため、大阪府赤十字血液センターとの打合せを実施し、安定的に献血者数を増す為に、以下の2点を目標に活動した。①献血初体験者を恒常的に増やすこと、②初体験者を二回目に誘導すること。そこで、エフエム大阪の放送では、毎週火曜日の夜9時30分に近畿大学、大阪産業大学、大阪福祉大学のガクスイメンバーによる大阪12の献血ルームにインタビューを行い、番組で放送している。また、毎週金曜日の夕方6時30分には番組「愛ですサークル」として、各血液型の備蓄状況を、天気予報のように伝えている。これによりリスナーの関心と初動を促すことができ、また、具体的な行動として、御堂筋献血ルームでライブイベントを実施することで、その場で献血の体験を実施することができている。

研究分担6：本研究の目的は、若者の献血及び輸血に対する意識について調査を行い、若者の献血行動や献血への意識を踏まえた、効果的な献血啓発方法を明らかにすることである。27年度は若者の献血行動や献血への意識を把握するために、献血・輸血に対するアンケートをA大学B学部学生に対して実施し、242名の回答を得た。また、若者の献血行動を促進するためには若者同士での啓発が重要であると考え、大阪府赤十字血液センター南大阪事業所及び大阪府藤井寺保健所薬事課・地域保健課と連携し、献血ボランティア講座を開催、B学部学生10名が参加した。また、アンケート翌週に献血バスをA大学Zキャンパスに配車し33名の受付、13名が採血を行った。来年度はアンケートを他大学、他学部にも依頼・配布し献血啓発を行ない、献血啓発ボランティアへの参加を働きかける。また今年度育成したボランティアの活動の場を広げられるよう、関係各所と調整を行っていく。

研究分担7：今年度は、献血でHIV陽性が判明したMSM2名および献血習慣のあるMSM1名を対象に、来年度に実施予定のwebアンケートのためのパイロットとしての聞き取り調査を実施した。インタビューシートを作成し、半構造化面接を個別に実施した。生涯の献血教育に触れた機会、献血時の問診を受けた経験について聞き取りを行った。加えて、

これまでの MSM としての気づき、性行動、HIV 検査行動に聞き取りを行った。結果、今回のインタビュー協力者の献血への動機は、すべての人が社会貢献で検査目的ではなかった。また、ウィンドウピリオドについての知識の浸透が不十分である点、現行の献血対象の排除項目の説明が MSM には必ずしも説得力のあるものにはなっていない可能性が示唆された。

研究分担 8：インターネットによる文献収集、学会資料による収集、そしてベルギー王国と台湾（中華民国）を訪問調査した。ベルギーでは、25 歳以下の献血者の占有率が高く、わが国の実態とは異なっていた。また、ベルギー赤十字社は、中学校、高校、大学での献血活動や学校イベントを熱心に支援しており、こうした活動は、初回献血者のみならず複数回献血者の確保に有効であった。さらにコールセンターを設置して、広く勧誘を行っていた。台湾の 2014 年の献血率は 7.5% とわが国より高く、人口 1,000 人当たりの採血量も 24.43L（日本は 10.94L）と多い国である。この背景には、中学校からの献血教育の充実と献血思想の普及があると考えられる。台湾もわが国と同様に少子高齢社会に入り、将来の献血者の減少が危惧されている。しかし、「我若く！ 我献血！（私は若い！ だから献血します！）」のスローガンのもと企業、スポーツ選手や芸能人などの有名人、さらには馬英九総統に至る歴代総統が率先して献血活動を国家レベルで進めている。わが国でもこれら 2 国と同じような献血推進事業を行なっているが、方法や効率性の観点からの見直しが必要であろう。

## 結論

本研究では次の 4 研究、1) 効果的普及啓発方法に関する研究、2) 献血教育研究、3) 安全な献血に関する情報提供方法の研究、4) 海外の実態調査に関する研究 を実施し、本年度は 3 年の 1 年目として当初の研究目標をほぼ達成できたと考える。

## 研究発表

### 【著述】

Yagura H, Watanabe D, Ashida M, Kushida

H, Hirota K, Ikuma M, Ogawa Y, Yajima K, Kasai D, Nishida Y, Uehira T, Yoshino M, Shirasaka T. Correlation between UGT1A1 polymorphisms and raltegravir plasma trough concentrations in Japanese HIV-1-infected patients. *J Infect Chemother.* 21(10):713-7, 2015.

Watanabe D, Suzuki S, Ashida M, Shimoji Y, Hirota K, Ogawa Y, Yajima K, Kasai D, Nishida Y, Uehira T, Shirasaka T. Disease progression of HIV-1 infection in symptomatic and asymptomatic seroconverters in Osaka, Japan: a retrospective observational study. *AIDS Res Ther.* 12:19. 2015.

白阪琢磨：HIV 感染症診療ガイドライン。新領域別症候群シリーズ 免疫症候群（第 2 版）II 35:584-96. 2016.

白阪琢磨：HIV 職業曝露の対応と予防内服の推奨。新領域別症候群シリーズ 免疫症候群（第 2 版）II 35:703-10. 2016.

### 【口演】

白阪琢磨：HIV 陽性者の人権問題～ HIV、AIDS 等の現状と課題～。大阪府人権総合講座 人権相談員養成コース、大阪、2015.

白阪琢磨：現代的健康課題についてー HIV/エイズや性感染症についてー。平成 27 年度新規採用養護教諭研修（第 10 回）、大阪、2015.

白阪琢磨：HIV 最新情報について解説。読売テレビ「情報ライブミヤネ屋」、大阪、2015.

白阪琢磨：献血推進。「安全な輸血確保による感染症予防」研修、吹田、2016.



平成27年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業

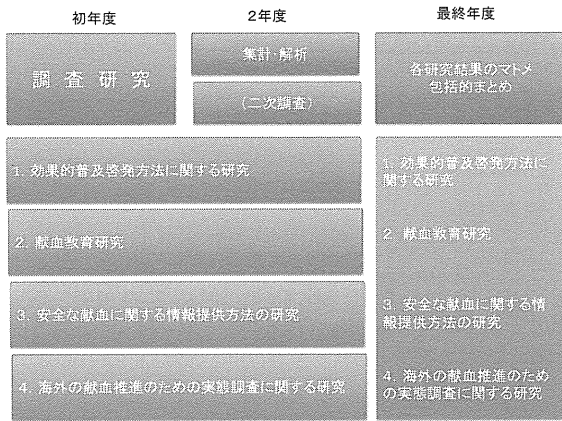
効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

平成27年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業

H27-医薬A-一般-006

効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究  
— 1年目 —

独立行政法人国立病院機構大阪医療センター  
臨床研究センター エイズ先端医療研究部  
白阪 琢磨



効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

効果的な献血推進に関する研究

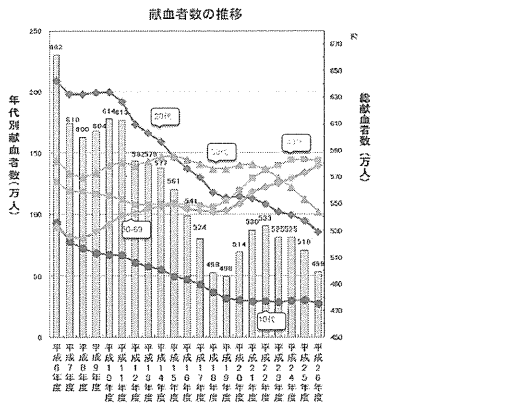
- ☆ 献血者の実情調査と献血促進及び阻害因子に関する研究  
西田一雄
- ☆ 献血推進のための効果的な広報戦略等の研究  
林清孝
- ☆ 海外における献血推進の実状と効果的な施策のあり方に関する研究  
河原和夫
- ☆ 出生年別にみた献血本数の推移に関する研究  
田中純子

相互連携

献血教育方策に関する研究

- ☆ 献血推進に向けた研修方法に関する研究  
瀧川正弘
- ☆ 輸血液の需要と献血教育に関する研究  
秋田定伯
- ☆ 若者の献血行動を促進する効果的な教育プログラムに関する研究  
大川聡子
- ☆ 若者の献血行動を促進する効果的な教育プログラムに関する研究  
生島嗣

最近の献血の動向



薬事・食品衛生審議会薬事分科会 第17回献血推進運動中央連絡協議会(平成27年11月6日)資料から

(表1) 高校生の献血場所別の献血者数 (単位:人)

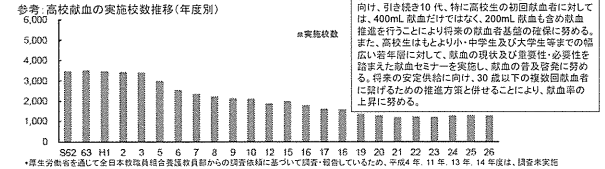
年度	献血バス 出張採血	献血ルーム 血液センター	合計
平成22年度	66,785	58,085	125,470
平成23年度	69,593	56,294	125,887
平成24年度	74,523	61,680	136,203
平成25年度	73,374	64,815	138,189
平成26年度	68,578	55,896	124,474

(表2) 献血セミナー参加者数

年度	参加人数	前年増減
平成22年度	21,456	-
平成23年度	30,395	141.7%
平成24年度	70,903	223.3%
平成25年度	91,285	173.9%
平成26年度	107,829	118.1%

※平成22年度及び平成23年度実績については、団体補助事業「青少年等献血ふれあい事業」前年献血セミナー事業の実績値に基づく。

平成24年に厚生労働省から文部科学省に対して、献血セミナー等の積極的に受け入れについて学校関係者へ働きかけていたことが功を奏したと見られ、平成24年度には参加人数が、対前年度40,508人と驚異的な増加があり、平成25年度にも同様な傾向が見られた。平成26年度は、献血セミナー開催日数の急激な増加に伴い増加等が継続中、引き続き「献血セミナー」に重点的に取り組んだ結果、参加人数が前年度から16,638人増加し、17歳男性の400mL献血は採血基準の変更以来過去最高の献血者数となった。



平成26年度の高等学校設置数は全国で5,014校中、献血実施校数は1,287校(前年度比98.2%)、献血者数は63,797人(前年度比93.0%)であった。 第17回献血推進運動中央連絡協議会(平成27年11月9日)資料より

400mL (人)

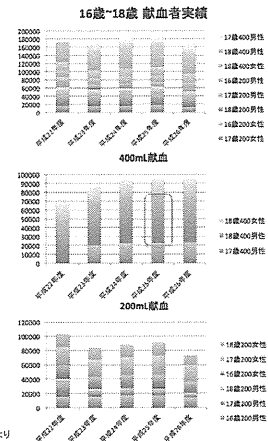
性別	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
17歳男性	19,912	22,531	22,939	23,411	22,275
増加割合	64.5%	65.0%	61.9%	62.8%	-
18歳男性	48,627	45,573	50,509	51,747	50,569
増加割合	32.6%	30.6%	66.4%	65.3%	63.4%
18歳女性	20,775	19,500	19,690	19,977	20,977
増加割合	65.6%	63.9%	62.7%	63.6%	68.4%

※採血基準の変更により、平成23年度の17歳男性に限り、400mL採血が可能となった。

200mL (人)

性別	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
16歳男性	12,510	12,192	13,886	13,446	11,497
増加割合	79.5%	79.5%	79.2%	77.8%	77.6%
16歳女性	19,295	17,383	18,711	19,165	19,283
増加割合	77.1%	78.5%	77.7%	78.1%	77.7%
17歳男性	29,300	6,924	5,998	5,762	3,856
増加割合	59.3%	66.7%	68.5%	66.2%	62.6%
17歳女性	25,073	24,237	25,339	26,995	28,174
増加割合	66.1%	54.4%	55.6%	52.9%	47.6%
16歳男性	4,173	3,823	2,955	2,823	2,424
増加割合	2,789	2,737	2,796	2,776	1,667
増加割合	68.0%	71.2%	79.0%	78.6%	69.4%
16歳女性	17,471	15,764	17,066	17,654	13,182
増加割合	10,373	9,567	9,992	10,184	6,734
増加割合	58.4%	58.5%	59.5%	57.1%	50.8%

平成27年度第2回血液事業部献血推進調査会(平成28年1月15日)資料より



効果的な献血推進に関する研究

平成 27 年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業 効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

## 供血者の実情調査と献血促進及び 阻害因子に関する研究

世界献血者デー「羽生結弦選手と共にいのちと献血の大切さを考える」  
6月1日、東京

日本赤十字社 血液事業本部 西田一雄

日本赤十字社 効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

### 1 献血推進広報効果調査 (現在実施中)

1. 目的  
日本赤十字社等が実施する献血推進に係る各広報施策の認知度及び献血行動に及ぼした影響について、定量的に把握し、今後の各広報施策及び全体プログラムの改善に資する。

2. 対象となる広報施策  
(1) 羽生結弦選手と共にいのちと献血の大切さを考えるイベント(6月)  
(2) Power of 献血(9~12月)  
(3) 羽生結弦選手と共にいのちと献血の大切さを考えるイベント(6月)  
(4) 世界献血者デー(6月)  
(5) 笑の血運動(笑い運動)(7月)  
(6) 赤十字-1のちと献血行動コンテスト(6~10月応募、12月表彰)  
(7) LOVE in Actionプロジェクト(通年)  
(8) ガクン(通年)  
(9) 献血ハイク(3月及び11月発行)  
(10) 笑のちが献血(4月発行)  
(11) エール(3月発行)  
(12) 献血セミナー(通年)  
(13) 献血サポーター(通年)  
(14) けんけつちゃん(通年)  
(15) ありがとう！っていい言葉(アンパンマンのエキス)(通年)

3. 調査対象者  
(1) 全国の献血可能年齢(16歳~69歳)の男女  
(2) 全国の献血会場の献血者

4. 調査内容  
(1) 過去1年程度の間実施された各広報施策の認知度  
(2) 過去1年程度の間献血行動の有無  
(3) 献血行動に各広報施策が与えた影響または献血行動を阻害した要因  
(4) 各広報施策を通じて得たどのような情報が役に立ったか

5. 調査方法  
(1) 全国の献血可能年齢(16歳~69歳)の男女  
① クロスアンケート(非公開調査)方式のインターネット調査  
② サンプル数6,000程度の標本調査とし、性別・年代別に均等に割り付ける。  
(2) 全国の献血会場の献血者  
① オープンアンケート(公開調査)方式のインターネット調査  
② サンプル数最大50,000の標本調査とする。

6. 調査時期  
(1) 全国の献血可能年齢(16歳~69歳)の男女  
平成28年1月23日(土)~平成28年1月24日(日)  
(2) 全国の献血会場の献血者  
平成28年1月23日(土)~平成28年2月21日(日)

性別	16歳~19歳	20歳~24歳	25歳~29歳	30歳~34歳	35歳~39歳	40歳~44歳	45歳~49歳	50歳~54歳	55歳~59歳	60歳~64歳	65歳~69歳	計
男性	250	275	275	275	275	275	275	275	275	550	550	3000
女性	250	275	275	275	275	275	275	275	275	550	550	3000
計	500	550	550	550	550	550	550	550	550	1100	1100	6000

調査項目	回答数
献血者	100
献血者以外	100
計	200

### 質問例

献血に行きたがらなかった人へ

献血に行きたがらなかった理由を複数回答できます。あなただけの理由とする必要はありません。

Q8

- 1. 実行したが、最終結果により献血できなかった
- 2. 実行したが、事前の理由による特異反応により献血できなかった
- 3. 200ml献血を受け付けていないと知られた
- 4. その他(理由を詳しく教えてください)

FA8回答 0

献血に行かなくなった人へ

2014年12月以前に献血に行ったことはあるものの、最近1年程度は献血に行っていない方にお願いします。あなただけの理由とする必要はありません。

Q10

- 1. 以前の献血で嫌な思いをしたから
- 2. 自分が献血しなくていいかなと思ったから
- 3. 献血が子ども達のかかる負担や経済的な負担、なぜ必要なのか分からないから
- 4. 献血できる場所や時間が合わなかったから
- 5. 献血できる量が少なかったから
- 6. 自分自身にメリットがない、見返りが無いから
- 7. 家族や友人に止められたから
- 8. その他( )
- 9. 特に理由はない

FA8回答 0

### 2 「献血推進2014」及び「献血推進2020」への取り組みに係るアンケート調査 (現在分析中)

1. これまでの「献血推進2014」の目標達成に向けた各赤十字血液センターにおける取り組みについて振り返り、今後の「献血推進2020」への取り組みに活かすこと

2. 調査対象  
47都道府県赤十字血液センター

3. 調査時期  
平成27年9月

4. その他  
本調査報告の取りまとめや分析については、血液事業本部献血推進課と平成27年度第1回献血推進小委員会「献血推進2014」の検証及び「献血推進2020」に向けた取り組み検討班が共同で行う

平成 27 年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業 効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

## 献血推進のための効果的な 広報戦略等の研究

(株)エフエム大阪 田辺善仁/林清孝

① FMOSAKA と よしもとクリエイティブエージェンシーが強力タッグ  
よしもとラジコ高校〜ラジコ 毎週月〜水曜日 21:00~21:55 生放送  
ターゲット：10代男女  
コンセプト：「笑い」を制した者のみがクラスを制する・・・それが大阪！  
献血推進コーナー：毎週火曜日：学天即 21:37~5分コーナー (事前収録)  
内容：大阪府献血センターの情報で近畿大学、大阪産業大学、大阪福祉大学のガクスイメンバー4人による番組コーナーの展開を実施。ガクスイメンバーが大阪12の献血センターに向いて献血者へのインタビューを実施し、番組で放送を行います。

② なんJMEGA! Z(毎週金曜日 15:00~19:00生放送)  
コーナー：愛でサークル (15:15~15:20生放送)毎週「献血予報」  
(情報提供：大阪府赤十字血液センター)

③ 御堂筋献血ルームCROSS CAFEに於ける新展開 Brand-new Blood @ CROSS CAFE  
★今年度の実施経過 ★ニコ生の追加配信によるビューワの増加！  
2011年12月からのU-streamに平成27年度から「ニコ生」も、U-streamの番組視聴者は一昨年の1万人から昨年は約2万人に倍増。10代に直接的に呼びかけられることが評価。参加高校生約3割が献血をして帰ると(大阪府赤十字血液センター)。

### V-Low マルチメディア放送

2015年7月25日開始

現在：車載・スマホ・タブレット・デジタルサイネージ(電子看板)

このVHF帯のうち、4チャンネルから10チャンネルは、自営放送(営業・消防)に利用されることが決まっております。それ以外の1チャンネルから3チャンネルが「VHF-Low(通称VLOW(パイロー))」、10チャンネルから12チャンネルが「VHF-HIGH(通称V-HIGH(ブイハイ))」と呼ばれています。

「VLOW」では、地域密着型の「地方ブロック向けマルチメディア放送」が開始される予定(2014年夏)で、「V-HIGH」では、全国向けの単一放送「全国向けマルチメディア放送」(NOTTV)が開始されています。現在、TOKYO FM、JFN(ジャパンエフエム・ネットワーク)および新規参入事業者は、「VLOW」帯での放送を想定しており、音声や映像をリアルタイムタイムで楽しむだけでなく、データ放送を活用した「便利な放送サービス」、「役に立つ放送サービス」を目指しています。

V-Low マルチメディア放送 <http://www.multimedia.co.jp/>

### デジタルステーション「アマネク献血」 スマホに向けた情報配信も。

デジタルステーション「アマネク」は放送、通信、位置情報を融合させた新しい情報メディアです！  
「放送の両面性」、「通信の双方向性」、「GPSによる位置情報」を利用してまったく新しい放送を開発いたします！  
高音質ミュージックで献血ルームの素敵なBGM放送も可能です。

- 「ハイレゾ」の高音質
- ルート上の天気や伝える「ウェザーインフォ」
- 献血バスや献血ルームをサポートする「献血バス・献血ルーム情報」
- 320kbpsの高音質ミュージックが無料で聞ける
- GPSによる献血バス情報
- GPSによる献血ルーム情報
- Beaconによるスマホ配信
- 320kbpsの高音質ミュージックが無料で聞ける
- GPSによる献血バス情報
- GPSによる献血ルーム情報
- Beaconによるスマホ配信

Wi-Fi BOX アマネクアプリ ビーコン 献血ルーム

2016年3月予定 ※アマネクアプリも同時リリース (iOS、Android)

海外における献血推進の現状と効果的な施策のあり方に関する研究

研究分担者 河原 和夫 東京医科歯科大学大学院 政策科学分野  
 研究協力者 菅河 真紀子 東京医科歯科大学大学院 政策科学分野  
 松田 利夫 北里大学・薬学部・社会薬学部門

目的

本研究では、世界各国の血液事業の中で、国情が日本に類似している国を選択して、研究対象国の高齢化などの社会的課題、それと対峙する血液事業の現状、献血推進方策や献血教育、社会において血液事業の認知度を上げるための対策などを調査し、その特徴を多角的に検討してわが国の献血事業の推進に寄与するための最適解を検討するものである。

調査対象国

ベルギー王国と台湾(中華民国)を選んだ。調査方法は、インターネットによる文献収集、学会資料による収集、そして対象国を訪れての資料収集や担当者への聞き取り調査を行った。ベルギー王国は、フランダース地方の「Brugge(ブルージュ)血液センター」、台湾は「台湾血液基金会」を訪問した。

結果(2) 台湾(中華民国)

台湾の2014年の献血率は7.5%とわが国より高く、人口1,000人当たりの採血量は24.43L(日本は10.94L)も多い国である。この背景には、中学校からの献血教育の充実と献血思想の普及があると考えられる。台湾もわが国と同様に少子高齢社会に入り、将来の献血者の減少が危惧されている。しかし、「我若く！ 我捐血！(私は若い！ だから献血します！)」のスローガンのもと企業、スポーツ選手や芸能人などの有名人、さらには馬英九総統に至る歴代総統が率先して献血活動を国家レベルで進めている。企業やボランティアの献血協力団体数は多い。若者の献血運動の「Young Blood」で17歳～20歳の若者を対象に一人が4年間に10回献血することを目標としている。

馬英九 総統の献血場面



献血運動「Young Blood」の一場



献血表彰



結果(1) ベルギー王国

ベルギーでは、25歳以下の献血者の占有率が高く、わが国の実態とは異なっていた。また、ベルギー赤十字社は、中学校、高校、大学での献血活動や学校のイベント支援を熱心に行なっており、こうした活動は、初回献血者のみならず複数回献血者の確保に有効であった。(オランダ語圏)支部では、「CLUB RED」と称する献血競争イベントを3月と9月に実施している。これは目標献血量を定めて大学間で競い合うものである。小学校では、生徒と親、そして教師を交えた「Fata Morgana」という献血教育を行っている。献血推進のためのヒーローを設定した漫画(コミック)も発刊している。さらにコールセンターを設置して、広く勧誘を行っている。採血時間も8:00～20:00と弾力的に運用している。

Brugge(ブルージュ)血液センター



献血推進の漫画①



献血推進の漫画②



考察・まとめ

ベルギー王国

- (1)献血希望に応じた業務体制 固定献血施設では採血時間を8:00～20:00にするなど、献血希望者の日常生活の苦難と合致したものとなっている。
- (2)競争 大学の献血競争「CLUB RED」もうまく若者の動機付けを引き出し、担当者も予算も少人数、低コストで多大な効果をもたらすものとなっている。
- (3)教育 献血動議活動に加え、学校での献血教育も盛んである。小学校では、小教室で生徒と親、そして教師を交えて献血に関するゲームを行ないながら、小さいうちからの献血の動機付け教育を行なっている。このように、上記のことの多くは、わが国でも行っているが、方法や効果性の観点からの見直しが必要であろう。また、後述の台湾でも導入されているが、競争原理の導入も一考に値すると思われる。

台湾(中華民国)

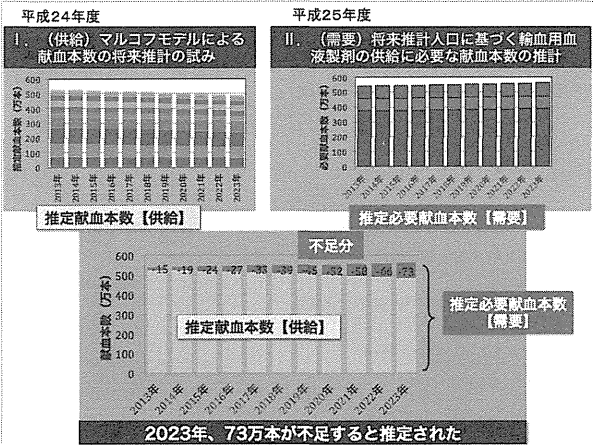
- (1)政治家の献血運動参加 総統のような国を率いる立場のヒーローが自ら献血推進事業に率先して参加し、国民に呼びかけている光景は日本では見られない。また、献血貢献者に対する表彰行事に参加することも献血を「美德」として国民に奨励するのにも効果があり、国をあげて献血を推進している。
- (2)競争 台湾のキャンペーンは、具体的な数値目標を掲げ、協力団体の一人ひとりが自ら献血を行う契機である。昨年からは始まった「Young Blood」では、「一人が4年間に10回」をスローガンに献血スタンプカードや献血スケジュール手帳などのグッズを用いて若い人たちにブームを呼び起こしている。高校生や大学生を対象とし、学校や大学を巻き込んでイベントや行事を盛り上げ、集団心理に訴える戦略である。高校に献血バスが行きづらなくなったわが国に比べ、学校の協力が得られることは大変強いことである。
- (3)教育 台湾では、中学の教科書において血液の成分や輸血の仕組みを説明するとともに献血の重要性を教えている。学校教育において助け合いの精神を育成するとともに献血事業の重要性を認めている。わが国では、やっと最近教科書に献血の文字が現れはじめ、その行数も少なく内容も乏しい。献血可能年齢になってからの呼びかけだけではなく、幼少のころからの教育を寄り充実させる必要がある。

今後の調査対象国(案) シンガポール・タイ・オーストラリア・アメリカ合衆国・ドイツ連邦共和国・オランダ・中華人民共和国 など

全国8ブロック別にみた 献血本数の将来推計の試み

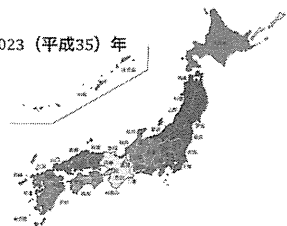
田中 純子、秋田智之

広島大学 大学院医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学

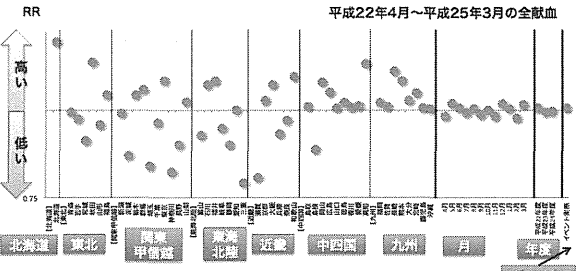


今回の報告 ブロック別推計の試み 対象

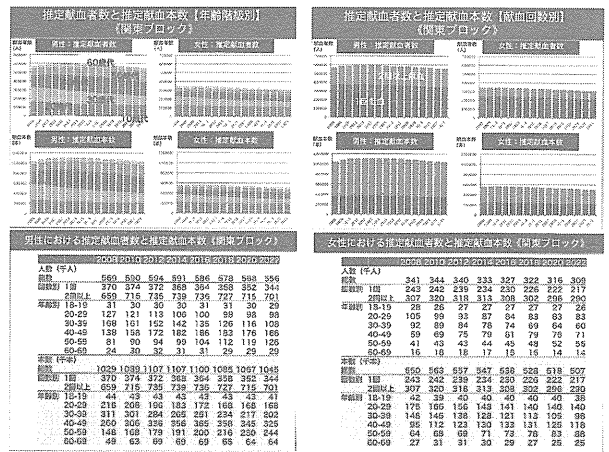
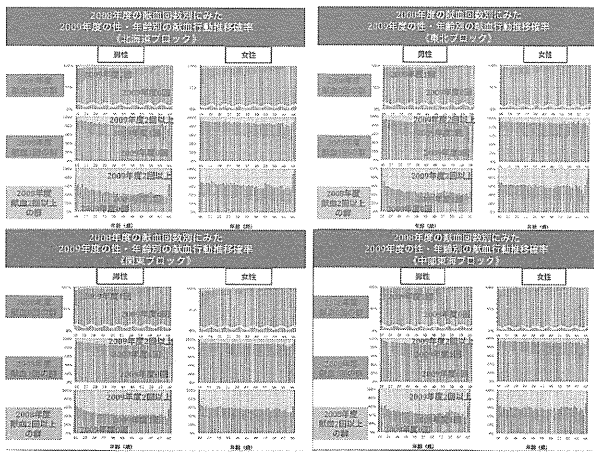
1. 解析対象：2008年4月1日から2010年3月31日までの全献血  
 2008(平成20)年度 5,137,612本  
 2009(平成21)年度 5,303,431本
2. 推定した献血本数の期間：  
 2008(平成20)から2023(平成35)年
3. 全国8ブロックの定義：  
 北海道、東北7県、関東7都県、中部東海8県、近畿7府県、中国5県、四国4県、九州8県
4. 解析項目：  
 ◆性別  
 ◆採血時年齢：献血年月日、生年月日から算出  
 ◆献血回数：献血者IDから算出  
 ◆献血回数推移：献血回数と献血者IDによる連結から算出



平成26年度 都道府県・月別にみた献血率(人口1000人当たり献血本数)の要因分析



調整献血率が高い都道府県：北海道、秋田、高知など  
 調整献血率が高いブロック：北海道、九州、中四国  
 調整献血率が高い月：5月、12月、3月  
 イベントを実施した月は有意に献血率が高くなる  
 (RR=1.008 (p<0.001))；イベント実施の月は月間献血者数が0.8%増加した)



## まとめ

- ◆ ブロックごとに性・年齢階級別にみた献血行動推移確率を算出したところ、いずれの地域においても同様の傾向がみられ、中高年層における献血行動の習慣化が示唆された。
- ◆ 関東ブロックにおいて、推定献血者数、推定献血本数は男女とも2010~2013年ごろまでは増加し、その後減少に転じると推定され、全国の推計値と同様の結果となった。
- ◆ 今後、推定献血者数の算出方法を、現在の献血回数2区分（1回、2回以上）から3区分（1回、2回、3回以上）に変更したうえで、ブロック別の献血者数、献血本数の推計を行う予定である。

## 効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

### 献血推進に向けた研修方法に関する研究

全国学生献血推進代表者会議からの活動状況と課題



日本赤十字社  
血液事業本部  
献血推進課  
瀧川 正弘

全国学生献血推進実行委員会の活動

平成27年度 全国学生献血推進ボランティア団体数 237団体 6,318名

ア) 第1回全国学生献血推進実行委員会 (日本赤十字社 本社)  
平成27年6月16日(土)~17日(日)  
・平成26年度の活動報告と平成27年度の活動計画  
・全国学生クリスマス献血キャンペーンの資料検討  
・グループ討議のテーマ協議 → 意欲改革(昨年と同様)

イ) 第2回全国学生献血推進実行委員会 (愛知県)  
平成27年8月19日(水)~21日(金)  
・検討事項のまとめ  
・第3回全国学生献血推進実行委員会への課題  
・グループ討議 → 学生ボランティアの役割を尋ね出す

ウ) 第3回全国学生献血推進実行委員会 (日本赤十字社本社別館)  
平成26年3月20日21日予定  
・全国学生クリスマス献血キャンペーンの実施報告  
・各ブロックにおけるイベントの報告  
・平成26年度実行委員長への検討事項の引継ぎ

若年層に對しての献血推進及び献血思想の普及を目的に活動を行っている、各都道府県の大学、短期大学及び専門学校におけるボランティアサークル等で構成されており、その代表組織である全国学生献血推進実行委員会において、学生相互の意見交換や全国統一キャンペーンの企画・立案等を行っている。

近畿ブロックの取り組み

- 近畿ブロック学生献血推進実行委員会・日本薬学生連盟との交流会
- 近畿ブロック学生献血推進実行委員会・関西女子大生団体richeとの交流会

九州ブロックの取り組み

- 九州ブロック学生献血推進協議会研修会
- 九州ブロック学生献血推進協議会統一イベント みんなで来なっせ！献血するモン ～そりゃーよかばい～

## 評価・考察

■ 全国の学生献血ボランティアが全国研修会という場を通じ、各地域に融合した学生独自の視点によるイベント、研修会及び他団体との交流等の取り組みが進んできている。

■ この研修会が学生ボランティアの主体的な行動を起こす起因となるきっかけとなっていることは、将来の献血基盤に向けた若年層推進の原動力になりうる考える。

長年積み上げた全国学生ボランティアによる研修が、互いを刺激し、各地域の取り組みを参考に、若年層に向けた献血推進を展開出来る環境が整いつつある。今後は同年代の目標に立った「献血セミナー」等に伝えたいメッセージを語るよう踏み込んだ研修の在り方を学生と共に構築したい。

## 輸血液の需要と献血教育に関する研究

長崎大学病院

長池 恵美  
五島美香子  
田中澄子  
濱本 洋子  
萩原絹子  
秋田 定伯



献血・輸血についてのアンケート調査

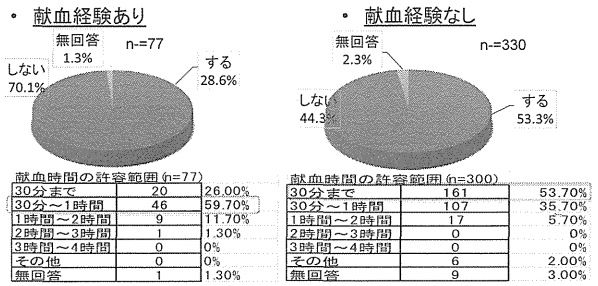
対象:長崎大学医学部保健学科学生  
調査期間:2015年6月~9月  
回収率:看護科(85.9%)、理学療法科(88.0%)、作業療法科(71.2%)

2015年	1年	2年	3年	4年	無回答	合計
看護科	69	58	60	74		261
理学療法科	13	16	19	18		66
作業療法科	13	12	16	11		52
合計	95	86	95	103		379

献血回数 (n=379)				献血場所 (n=77)	
0回	300	11-20回	1	献血ルーム	31
1回	52	21-30回	0	献血車	43
2回	12	31回~	2	その他	1
3-5回	7	無回答	2	無回答	2
6-10回	3				

結果(抜粋) 献血についての詳細な知識の正答率は、開始可能年齢 35.1%、採取量 53.9%、輸血者の献血不可能性 28%、献血ルームの場所 62.8% と決して高い結果であった。

献血経験別の献血敬遠の比較



- 献血を敬遠する学生は献血経験者で28.6%、未経験者は、53.3%であった。
- 敬遠の理由として、献血経験者では、時間、不安が多く、未経験者では、不安、時間、健康上理由、場所の不便さなどであった。
- 敬遠する理由の具体記載では、貧血など健康、不安、恐怖などに起因していた。

長崎大学病院での献血車活動報告

8月21日 献血車(歯学部玄関前)

午前 9:30~11:00 献血車周知の放送はせず。12名献血  
午後 12:30~13:30 献血車周知の放送はせず。11名献血  
13:30~14:30 1回目の献血車周知の放送施行。13名献血  
14:30~16:30 2回目と3回目の献血車周知の放送施行。26名献血  
以上、献血者合計62名

広報:院内放送  
イントラネット掲載

イントラネット掲載  
※前回よりも多い受付数でした。ただし、諸事情で受け付けに来て下さったけれど、できなかった人もこの中に含まれているそうです。献血車周知の放送後、放送を聞いて来たと言って下さった人もおられたようです。



平成27年度厚生労働科学研究費補助金 医療・医薬医療研究費(コホート)研究費 効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

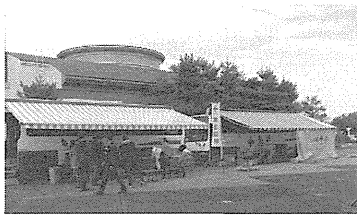
若者の献血行動を促進する効果的な教育プログラムに関する研究

大阪府立大学看護学類 大川聡子  
安本理紗  
根来佐由美  
上野昌江  
川口広志  
松田彦彦  
森ともし  
酒井典子

大阪府赤十字血液センター南大阪事業所事業課  
大阪府藤井寺保健所事業課  
大阪府藤井寺保健所企画調整課

2015年度の取り組み

- ①「献血・輸血に関するアンケート」作成と配付、集計  
2015年4月~11月
- ②「献血ボランティア講座」の実施  
2015年12月8日
- ③ 献血バス配車  
2015年12月15日



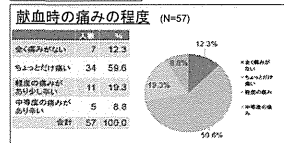
①献血・輸血に関するアンケートの実施

調査期間:2015年11月 対象:A大学B学部学生 266名  
回収数 243名(91.4%) 有効回答数 242名(91.0%)

献血の経験 (N=239)	最初の年齢 (N=57)
なし 180 (75.3%)	15~17歳 13 (22.8%)
あり 59 (24.7%)	18~19歳 59 (24.7%)
1回 32 (13.4%)	20~24歳 11 (19.3%)
2回 10 (4.2%)	25~29歳 2 (3.5%)
3回~ 17 (7.1%)	

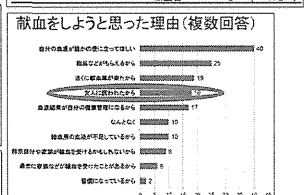
基本属性 (N=242)

項目	人数	%
年齢		
年齢層区分		
10歳代	121	(50.0)
20歳代	113	(46.6)
30歳代	3	(1.2)
無回答	5	(2.1)
性別		
男性	13	(5.4)
女性	227	(93.8)
無回答	2	(0.8)
家族形態		
1人暮らし	49	(20.2)
家族と同居	190	(78.5)
無回答	3	(1.2)



献血車の情報入手方法

その他	35
郵便	12
新聞	12
校内放送	8
テレビ	8
ネット、スマホ、携帯	17
口コソ	43
ポスター	115



②献血ボランティア講座の実施 ③献血バスの配車

- 共催:大阪府赤十字血液センター、大阪府藤井寺保健所事業課・企画課
- アンケートの翌週に、献血バスをA大学Aキャンパスに配車。
- 学生向け献血ボランティア養成講座開催  
参加者:10名
- 時間:11:00~14:00  
• 受付 33名 ⇒ 採血 13名 (400mL 5名、200mL 8名)
- 不参加の理由  
貧血が13名、体重、時間がない、服薬など



献血が(どのくらい)不足しているかを、若者たちに届く方法で周知することが必要

気付きから行動へ 医療従事者としての自分の行動にも影響

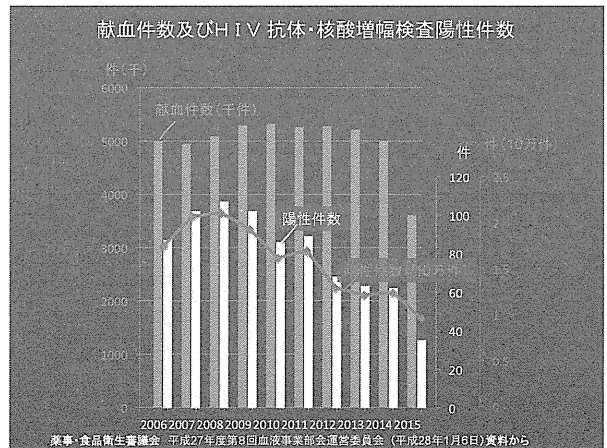
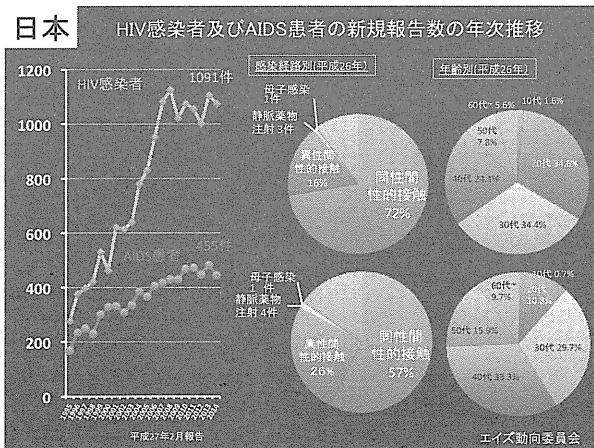
平成28年度予定  
①アンケート調査の拡充  
他学部(200部)、他大学(200部)へ  
②ボランティア活動の活性化  
養成した献血ボランティアと協働し、大学祭等の献血バス配車時に献血推進を実施。アンケート実施と共に献血の啓発とボランティア参加を促す。

今後の目標

- ①献血行動の推進要因の分析と可能なら因果関係を明らかにする。
- ②男女の献血推進ボランティアの養成。

安心・安全な献血の確保のために

特に、HIVについて



平成27年度厚生労働科学研究費補助金 医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業

### 効果的な献血推進および献血教育方策に関する研究

## HIV感染ハイリスク層への情報伝達方法及び意識調査の研究 ~パイロット調査としての半構造化インタビュー (中間報告)

研究分担者 生島剛 (特定非営利活動法人ぶれいす東京)  
 研究協力者 岩橋恒太 (特定非営利活動法人akta)  
 市川誠一 (人間環境大学)  
 藤田彩子 (東京大学大学院)

#### 研究目的

・安全な献血血液確保のための有効な情報伝達のあり方および普及啓発方法を検討し提示するため、ハイリスク層であるMSMにおける献血についての意識や行動の実態を明らかにする。

#### 研究方法

・本研究では、MSMを対象とし無記名自記式ウェブ調査を実施する。本調査に先立ち、適切な質問紙作成のため半構造化インタビューを用いたパイロット調査を行う。その後、パイロット調査をもとに修正を加えた質問紙を用いて、本調査を行う。

#### 調査概要

- ・インタビュー実施期間 平成28年1月
- ・インタビュー協力者のリクルートは2015年11月~12月に実施。リクルートは、HIV陽性MSMの場合は、ぶれいす東京に面談相談で来所経験がある者から募り、献血習慣があるMSMの場合は機縁法にて協力を依頼。
- ・調査に先立ち、ウェブ調査の調査項目に関わるインタビューシートを作成。
- ・献血で陽性が判明したMSM2名および献血習慣があるMSM1名を対象に、個別の半構造化インタビューを実施。半構造化インタビューの実施時間は各回60分程度。献血や検査に至る経過について面接し事例を収集。その内容に基づいて調査項目の妥当性を検討。
- ・面接内容は研究参加者の同意のもと、フィールドノートの作成およびICレコーダによる録音。
- ・ぶれいす東京 研究倫理委員会による審査を経た(2015年11月)

### インタビューシートの主な内容(全26問)

- ・ 属性
- ・ 自己のセクシュアリティの認識や行動
- ・ 献血経験、動機、知識
- ・ HIV検査受検経験
- ・ 献血/エイズ教育に触れた経験

### インタビューのポイント

- ・ 献血の動機について
- ・ 問診票の排除項目について
- ・ 献血でのHIV陽性告知とコールバックシステムの知識について
- ・ HIV陽性告知時の対応について

### 半構造化インタビュー結果(中間報告)

- ・ 献血の動機としては、社会貢献が主なもの。HIV検査の代用として献血を利用している人は、今回のインタビュー協力者にはいなかった。むしろ、自己の感染の可能性が低いとの認識が献血行動の合理性をもっていた。
- ・ 問診票の献血排除項目については、MSMのなかには合理的、説得力があると受け取らない人がいる可能性がある。場合によっては、「差別的」と受け取られ、排除項目の説得力を弱めているとインタビュー協力者からは、文言のさらなる改訂の希望が聞かれた。
- ・ 献血でのHIV陽性告知の知識について、「結果告知は本人にされたい」と理解されていた。自分が告知される立場になって、初めて知ったと答えていた。
- ・ セクシュアリティについて、献血開始時期には本人にも明確になっていない場合が多く、成人以前の時期の教育はそうした自己の認識の曖昧な時期に教育することになる可能性がある。
- ・ 学校等で、HIV/エイズに関する教育だけでなく、献血についての教育も、どのインタビュー協力者も経験が無いが、記憶にないと答えていた。
- ・ 理由は理解できても、「献血を検査目的で受けるな」と声高に言われると、HIV陽性者で献血で感染がわかった協力者にとって、「自分がまるで犯罪者のように言われている気がして、同じ陽性者でも感染経路について話すことができない」と話っていた。
- ・ パイロット調査結果の限界はぶれいす東京のネットワークにより機縁法によるため、対象集団を代表しない。しかし、多様なハイリスク集団で同様の行動がおきる可能もあるため、今後ともより普遍性のある分析を進めていきたいと考えている。

### 今後の計画

- ・ 本調査: MSNを対象にしたクラブ来客者や一般MSM向けホームページ利用者を対象に、パイロット調査をもとに作成した質問紙を用いて、ウェブ調査を行う
- ・ リクルート方法は、クラブ来客者の場合はQRコードまたはURLを案内、一般MSM向けホームページ利用者の場合はホームページにバナー広告を出稿し、200人を目標に、ウェブ調査へリクルートする。
- ・ 研究成果の発表については、どのような対象者に、どのようにフィードバックするのか等、研究代表者、関係機関の意見も聞きつつ慎重におこなっていく。

### まとめ

- 献血推進プロジェクトLove in Actionは実施月で0.8%の増加をもたらした。
- 献血者数は20代、30代の減少が続く。10代も再び低下傾向となった。ただ、献血セミナー参加への働きかけが功を奏してか17歳の400mL献血者数が過去最高になるなど、有効な方法により献血者数を確保できる可能性が示唆された。
- 国内の年間HIV感染者数、エイズ患者数は減少傾向にないと考えられるが、献血件数当たりのHIV抗体・核酸増幅検査陽性件数の減少傾向が示唆された。
- 日本赤十字社の献血推進広報効果の調査を行い、献血推進2014と2020の取り組みへのアンケート調査を実施し、現在、分析中である。
- マルチメディア放送による地域密着型の広報(V-Low)が可能となった。個別化も可能な献血推進の在り方として効果が期待され、検討が必要と考える。
- ベルギー王国、台湾の献血推進の現状を調査し、効果等に付き検討した。
- 全国8ブロック別の献血本数の将来推計を試みた。
- 若年者に向けた献血推進方策として日本赤十字社の学生献血推進ボランティア組織の自主的活動の有用性や大学生への献血教育の将来性が示唆された。
- ハイリスク層への半構造化インタビューの実施と分析を経て、来年度はウェブ調査の予定である。

# 分担研究報告

## 2

## 献血推進施策の効果に関する研究 全国8ブロック別にみた献血本数の将来推計の試み

研究分担者：田中 純子（広島大学大学院医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学）

研究協力者：西田 一雄（日本赤十字社 血液事業本部）

井上 慎吾（日本赤十字社 血液事業本部）

安藤 正吉（日本赤十字社 血液事業本部）

照井 健良（日本赤十字社 血液事業本部）

秋田 智之（広島大学大学院医歯薬保健学研究院 疫学・疾病制御学）

### 研究要旨

近年の献血本数の減少から、輸血用血液製剤の不足が危惧されている。本分担研究でこれまで行った献血本数の将来推計をブロック別に行い、将来の献血の需要と供給を把握するための基礎資料とすることを目的とした。

対象は2008年4月1日から2010年3月31日までの全献血（2008年度：5,137,612本、2009年度：5,303,431本）であった。全国を8ブロックに分け、ブロックごとの献血行動推移確率を算出した。また、その中の関東ブロックにおいて、2008-2023年の推定献血者数および推定献血本数を算出した。

ブロックごとに性・年齢階級別にみた献血行動推移確率を算出したところ、いずれの地域においても同様の傾向がみられ、中高年層における献血行動の習慣化が示唆された。

関東ブロックにおいて、推定献血者数、推定献血本数は男女とも2010～2013年ごろまでは増加し、その後減少に転じると推定され、全国と同様に、輸血用血液製剤の不足の可能性が示唆された。

### 研究目的

近年の献血本数の減少から、輸血用血液製剤の不足が危惧されている。

本分担研究でこれまで行った献血本数の将来推計をブロック別に行い、将来の献血の需要と供給を把握するための基礎資料とすることを目的とした。

### 研究方法

#### 1. 解析対象

2008年4月1日から2010年3月31日までの全献血を対象とした。2008(平成20)年度は5,137,612本、2009(平成21)年度は5,303,431本であった。

全国8ブロックは北海道、東北7県、関東7都県、中部東海8県、近畿7府県、中国5県、四国4県、九州8県であり、内訳を図1に示した。

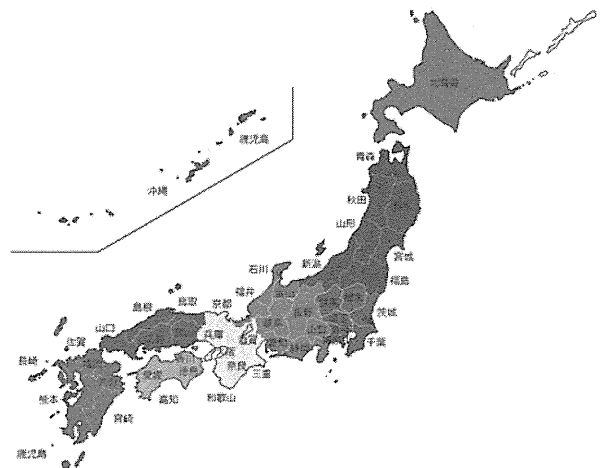


図1. 全国8ブロックの定義



## 2. 解析方法

以下の作業をブロックごとに行う。

1. 初年度から次年度の献血回数（0 回、1 回、2 回以上）の変化を性・年齢（1 歳刻み）別に集計し、献血行動推移確率行列を算出する（ $2 \times 51=102$  個）。
2. 性・年齢別に 2008 年度の献血者数と献血行動推移確率から 2009 年度以降の推定献血者数を順次算出する。なお、20 歳の献血回数は 2008 年における 20 歳の献血回数（0 回、1 回、2 回以上）の比率と出生年別人口から推定した。
3. 献血回数別人数と献血回数から推定献血本数を算出する。ただし「献血 2 回以上」献血者の平均回数は 2008 年度の「献血 2 回以上」献血者の年齢別平均献血回数とした。

※献血回数 0 回の人口は、平成 17 年国勢調査人口による確定人口から実献血者数を減じて算出した。

なお、「今回推計」は「各年度の献血回数は前年の献血回数のみに影響を受け、それ以前の年度に何回献血したかは関係なく次年度の献血回数が決まり（マルコフ性）、初年度から 10 年間は推移確率が変わらない。」という仮定のもとに算出した。

## 研究結果

### 1. ブロック別にみた献血行動推移確率

図 2～9 に、8 ブロック別にみた献血行動推移確率を示した。グラフは横軸が年齢（1 歳刻み）であり、2008 年度の各献血回数の集団について 2009 年度献血回数が 0 回、1 回、2 回以上になる献血行動推移確率を示している。献血行動推移確率はおおむね年齢とともに滑らかに変化していた。地域による差はあまり認められず、どの地域においても献血回数 0 回群が次年度も献血をしない確率は高齢であるほど高く、献血回数 1 回群または 2 回以上群が次年度に 1 回以上献血する確率も高齢であるほど高い傾向がみられた。

### 2. 推定献血者数と推定献血本数《関東ブロック》

図 10、11 に 2008 - 2023 年における推定献血者数（上段）、推定献血本数（下段）の推移を示した。推定献血者数について、男性では 2012 年の 593,824 人を、女性では 2010 年の 343,878 人をピークに増加から減少に転じていた。推定献血本数においても、男性では 2013 年の 1,108,408 本を、女

性では 2010 年の 562,510 本をピークに増加から減少に転じていた。年齢階級別にみると男女とも 20・30 歳代の推定献血者数は減少、40・50 歳代の推定献血者数は増加傾向がみられた。

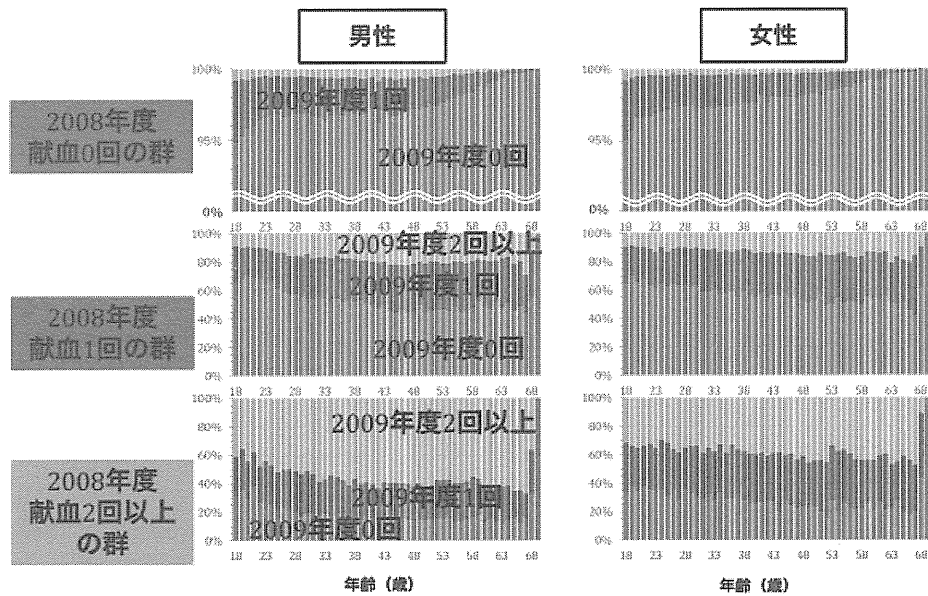


図2. 2008年度の献血回数別にみた性・年齢別献血行動推移確率《北海道ブロック》

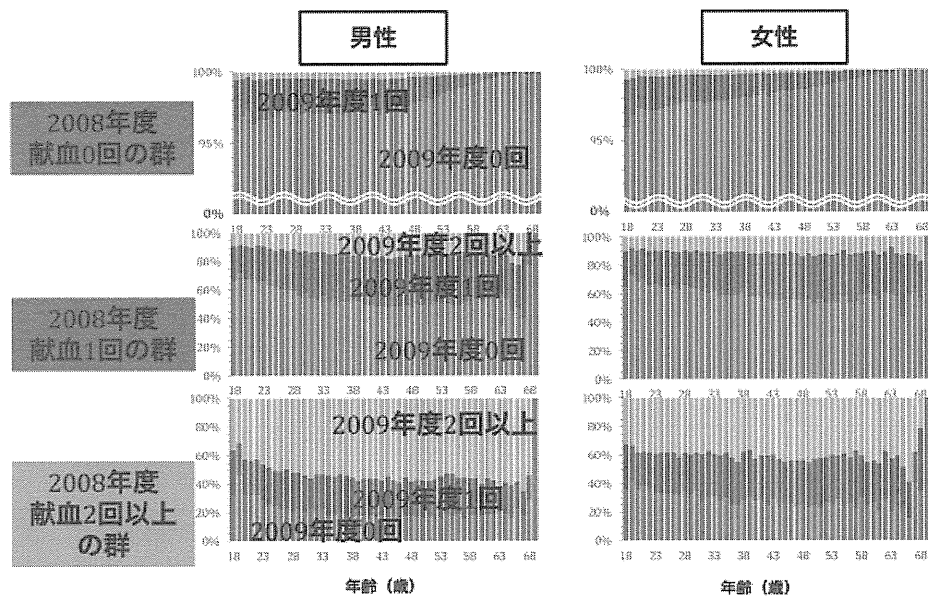


図3. 2008年度の献血回数別にみた性・年齢別献血行動推移確率《東北ブロック》

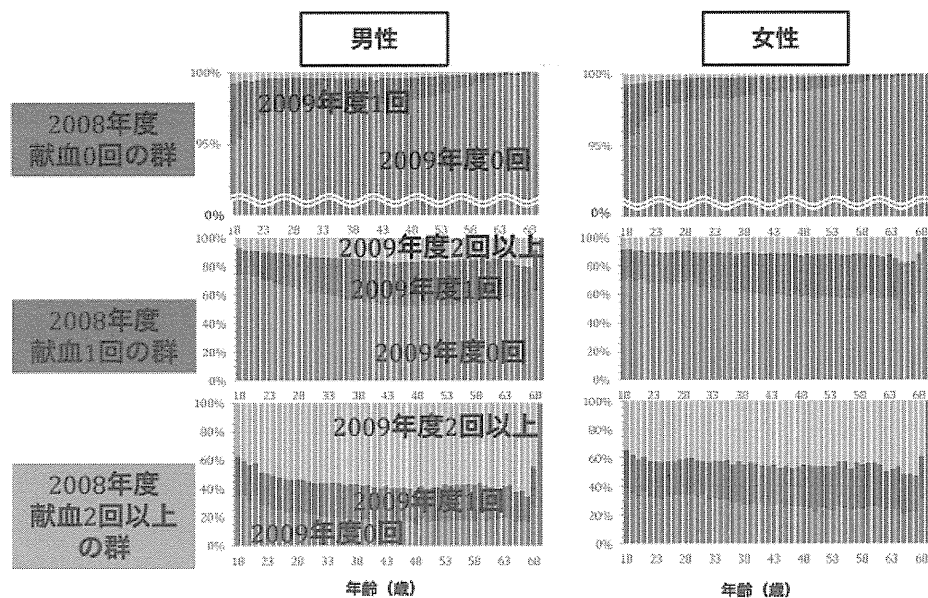


図4. 2008年度の献血回数別にみた性・年齢別献血行動推移確率《関東ブロック》

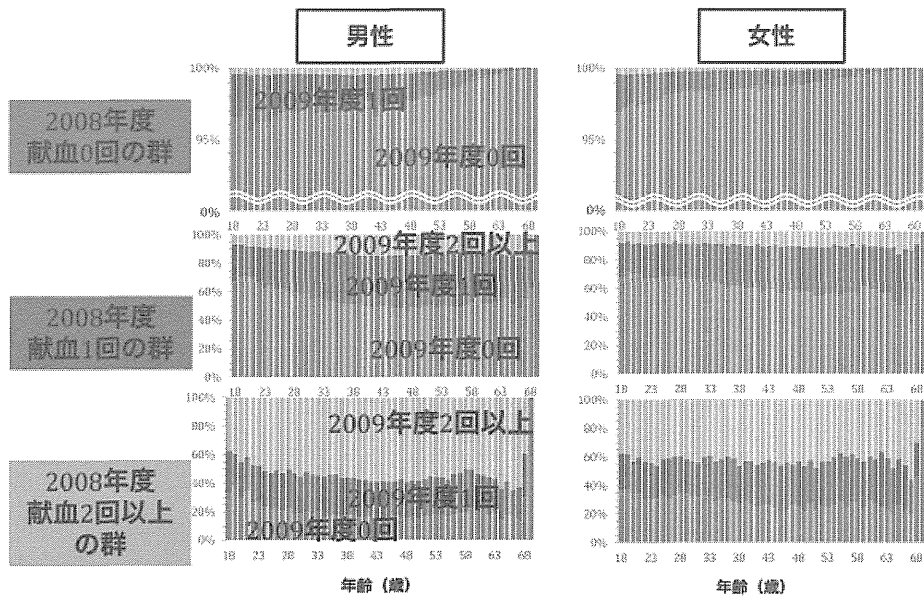


図5. 2008年度の献血回数別にみた性・年齢別献血行動推移確率《中部東海ブロック》

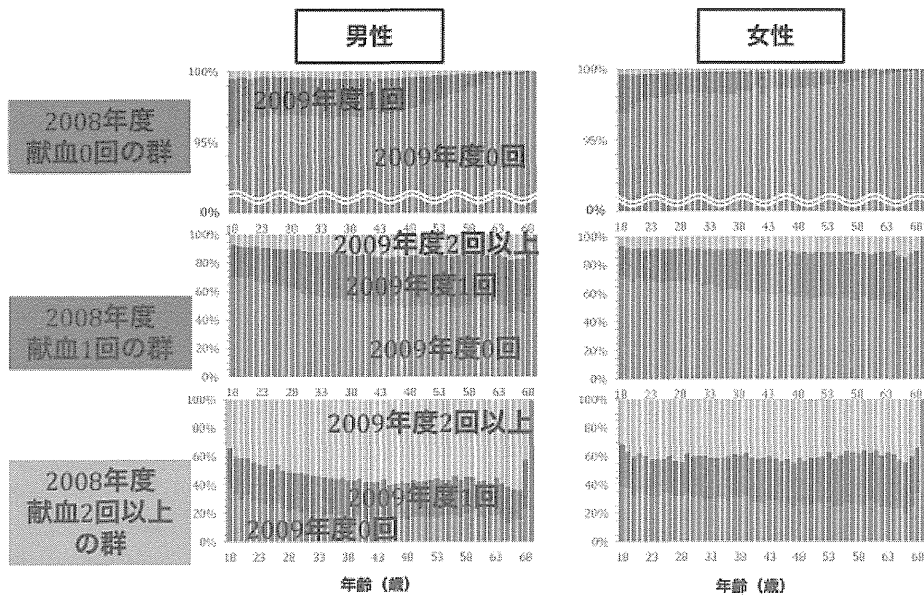


図6. 2008年度の献血回数別にみた性・年齢別献血行動推移確率《近畿ブロック》

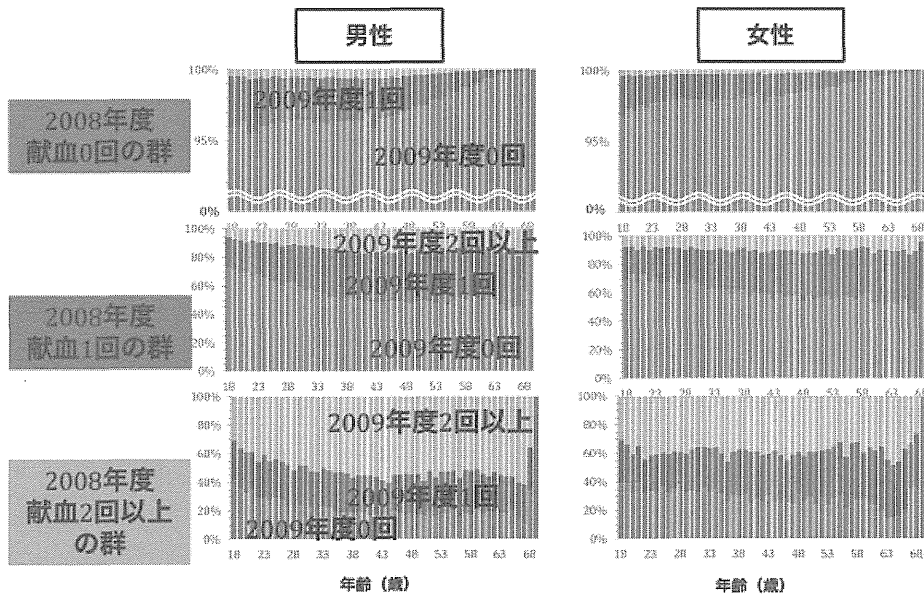


図7. 2008年度の献血回数別にみた性・年齢別献血行動推移確率《中国ブロック》

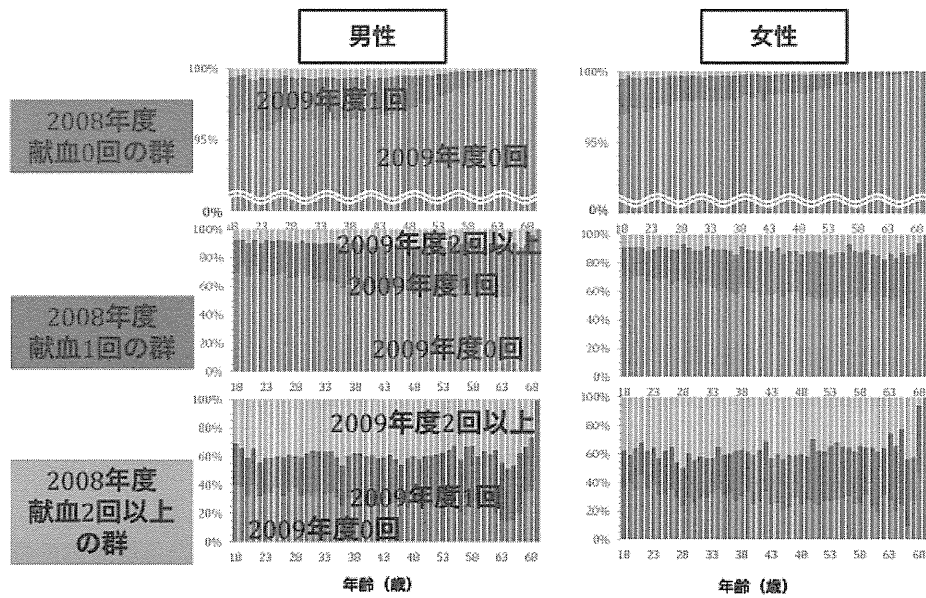


図8. 2008年度の献血回数別にみた性・年齢別献血行動推移確率《四国ブロック》

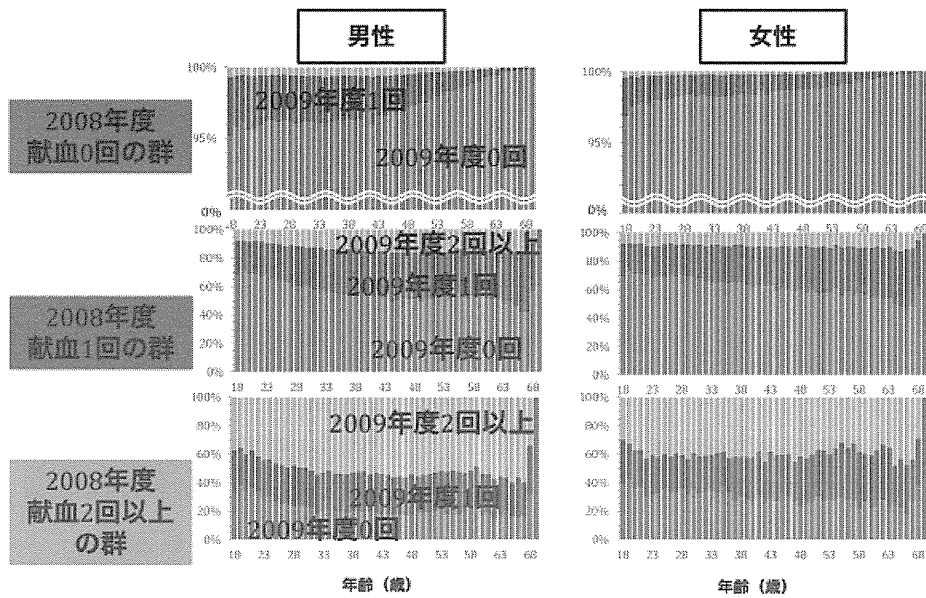


図9. 2008年度の献血回数別にみた性・年齢別献血行動推移確率《九州ブロック》